

セキュリティの原点： 日本の心

JNSA 顧問 東京大学教授 CISSP
安田 浩



個人情報保護法が2005年4月より完全施行され、個人情報保護に関する関心が日本社会でも急速に高まっています。水と空気と安全は「ただ：無料」と考えていた日本でも、安心・安全にはかなりコストがかかることを自覚するようになる、良い機会と思います。しかしながら、いたずらに危機感を煽るばかりで、情報の守秘感度に関する考察がおざなりにされているのではないかと心配です。

個人情報には2種類有り、変更が可能なので守秘感度が低い個人情報と、変更が不可能なため守秘感度が高い個人情報とがあります。前者の代表はクレジットカード番号などで、後者の代表はDNA情報などです。前者は盗まれたことに気が付いたときに解約・変更すれば良く、盗まれてから解約・変更するまでの期間にしか被害は発生しません。したがって盗まれたかどうかをいかに迅速に知り、解約・変更手続きに入れるかがセキュリティの基本になります。

一方DNA情報などは、悪人に盗まれると変更がきかないために、一生苦しむことになります。たとえうっかりミスでも外に漏れては困る訳です。絶対に盗まれてはならない、これが後者の個人情報に関するセキュリティの基本方針です。盗まれたことを迅速に発見する技術は色々考案されていますので、この面のセキュリティはかなり高いレベルになってきたと思っています。しかしながら、ミスも許さない絶対に盗まれてはならない方策など存在するのでしょうか。

日本人は安全を「ただ」と思ってきました。その前提は、すべての人が「一見さんお断り」と「見ざる聴かざる言わざる」を理解し、実行しているということにあるのだと思っています。個人認証と漏洩後対策の原点をここに見ることができると思います。

この前提は、ネットワークで国外とつながれることによって崩れつつあります。契約万能の米国社会では、「一見さんお断り」と「見ざる聴かざる言わざる」とは全く理解出来ない世界だからです。一人でもこれらの原則を理解せずその逆手をとる人が出てくれば安全は脅かされ、次々に逆手を取る人が増える負の連鎖が始まります。そうなれば、ネットワークを切り離すか、新しいセキュリティ技術を導入するかの選択を迫られることとなります。日本社会は今、後者の選択を否応なく迫られている事態といえましょう。

ポイントは、セキュリティ技術設計の基本方針にあります。米国流の基本精神では守ることと破ることがいちごっこで、どこまでいっても安心・安全にはなれないようです。日本古来の「一見さんお断り」と「見ざる聴かざる言わざる」という基本精神を具現化するセキュリティ技術を地球上すべてに植え付けることができれば、安全は皆のものになると信じています。地球が宇宙に広がっても基本は同じです。

この日本の精神を具現化するセキュリティ技術を研究開発し、世界に普及することが日本セキュリティ技術陣に課せられた第一の使命と思います。JNSA が研究開発の先頭にたつことを心から祈念いたします。